

などが見られた。その中に、ウラジロモミ、ハリモミ、コメツガ、ヒメマツハダ、ネズミサシ等の針葉樹がわずかに混生しているのを見る。草本として、ナガバノコウヤボウキ、オオバシヨウマ、ミヤマアキノノゲシ、イチヤクソウ、ヤマシキヤク、ミヤマハダザオ、イワハダザオ、ウメガサソウ、低木としてミツバツツジ、ハヤザサヒョウタンボク、ツクバグミ、オトコヨウゾメ（極めて小葉のもの）、クロカンパ等であった。

そのあと山梨県白州町大武川の溪流をさか登り、ナツツバキの採集に行く。途中の溪流の岩場にイワタバコを見ることができた。帰途富士見町上萬木の三光寺により、諏訪地方ではこの附近にしか見られない、ウラシマソウを見る。天候には恵まれなかったが有意義な採集会であった。

【秋季合宿調査報告】

米子谷の植物を追って

和田 清

昭和50年9月6日～7日の両日、植物研究会の採集会が須坂市東方、米子川流域を主として行われた。参加された会員は、伊藤、奥原、北村(英)、清水(剛)、堤、堀米、望月、山越、山崎等の各氏と幹事の和田の他、非会員の長谷川、足達、横山、真岡、丸山、浜中の学生諸君であった。

9月に入ると例年なら秋雨の季節。雨を覚悟の例会ではあったが、連日の残暑が続き、しかも、車へ乗った途端に激しい夕立となるという、まことに恵まれた2日間であった。しかし、さすがに9月ともなると、深山の緑に初秋を思わせる風情の中で、かつての菅平、角間川溪谷採集会に次いで3回目の上信国境(上信火山帯)の採集会は有意義に進められた。裏日本と表日本要素の接点になると期待されてきた奥原氏、ミヤマニガウリが出る度に歩を止めては熱心に説明される堀米氏、もしやヒメスミレサイレンでは(後日、奥原氏の同定によりミヤマスミレの大形品)とかがみこん観察される望月氏、どこの採集会へも参加をと意気込まれる北村氏、コウモリソウ属に目を光らす伊藤氏、シダ類に焦点をしばって参加という清水氏、ササ類を黙々と調べ歩く堤氏、奥原先生の年令ならまだ負けまいと張切る山越氏、佐久の植物との共通点を追う山崎氏等それぞれ目的をもっての参加であった。

9月6日(第1日め)、仙仁温泉より大笹街道沿いに仙人山ノ神往復。須坂一菅平線も既に補装され、山歩きの足には何とも歩きにくい。所々にシラカンパを混じえたコナラ等の二次林やヤシヤブレ、フサザクラ、ケヤマハンノキなどからなる河畔林は見られるが、ほとんどは植林域。谷の湿潤地にはスギがよく成長し、残存木から見ても潜在自然植生は、ケヤキ林域であることがうかがえる。山腹から尾根筋にはカラマツが広く植林されている。一般にこの地方は、低海拔地は個人の持ち山(スギ植林が主)、上部は財産区有林(カラマツ植林)で、植林がよく行き届いている。初日は、車道沿線のため目新しい種は出てこなかったが、(ケナシ)ヤブデマリ、赤い実やハギ(ヤマハギ)、オトコエシ、ナンブアザミ等、秋の訪れを感じさせる半日であった。宿では、岩窟風呂と

清水会長無事帰国の報告を着にささやかな宴が持たれ、採集品の整理が夜遅くまで行われた。

9月7日(第2日め)今回の目的地米子不動尊(奥院)往復に朝早くから期待がかけられた。幸、天気にも恵まれ、三台の車とバイクに分乗して車道の終点ろう石鉱山跡まで、そこから、米子川の狭い谷底沿いの歩道は、植物も豊富で格好な採集地であった。出現した主な植物を列記すると、ヒメゴヨウイチゴ、ミヤマシダ、キョダキシダ、ブナ、マルバマンサク、アサマヒゴダイ、ハルユキノシタ、フサザクラ、カントウマユミ、タマアジサイ、シウリザクラ、コタニワタリ、トチノキ、ウダイカンバ、イタヤカエデ、オオカニコウモリ、コウモリソウ、ウスゲタマブキ、レンゲシウマ、トチパニンジン、サラシナシウマ、ニシキウツギ、オガラバナ、ダケカンバ、サワダツ、ヤグルマソウ、スミレサイレン、ノリウツギ、オヒョウニレ、ホソイノデ、オクモミジハグマ、ヤシヤブレ、サワシバ、オノオレ、ミヤマスミレ、アイズシモツケ、オククルマムグラ、ミヤマニガウリ、クマシデ、ジウモンシダ、カメバヒキオコシ、ミヤマハタザオ、クロクモソウ、コシジシモツケ、オオメシダ、ミヤマツチトリモチ、ザリコミ、チドリノキ、オオバイラクサ、ミヤマアキノゲシ、ツルネコノメソウ、センジュガンピ、ミヤマベニシダ、スズタケ、ミヤマアオダモ、ツノハジバミ、サラサドウダン、ハウチワカエデ等々であった。海拔1,100m~1,500mにまたがるこの地域は、夏緑広葉樹林(ブナ)帯にあたり、土壌の貧弱な尾根筋には、ツガが望見される。ブナは単木で見られるが、かつて林として存在したかは定かではない。ただ、米子不動尊の一つに数えられるという程であるから、古くから信者の往来があったことは確かで、このような奥地にまで薪炭材を求める手が伸びていたことは、炭焼きのかま跡からもうかがえる。更に、奥院の対岸では、硫黄の採掘がかなり大がかりに行われていたので、これらの影響を受けてきたことも事実であろう。米子川に落ちこむ両壁は急峻で、四阿火山群のカルデラ地形であるという。奥院の左右には、不動滝と権現滝が40~50mの急崖から落下し、水煙の中をとび交うイワツバメの異様な鳴き声は、いっそう聖域を感じさせる。

帰路は、赤茶けた硫黄鉱山跡の裸地から、奇妙山の山腹をまいて起点へたどり着いた。植生学的にも興味のある自然が随所に広がっている地域の一つであった。

尚、奥原氏からは、レンゲシウマの今のところこの山列での北限であるというお話があった。また、丸山利雄氏の紹介によって、ミヤマツチトリモチの新産地として報告された(ヤッコソウ、ツチトリモチの友、1976, Vol. 4, No. 4 東京)。

〔植物ニュース〕 10. ケシウヤナギ *Chosenia arbutifolia* (Pall.) A. Skvortz. 今年の3月下旬、松本市郊外梓川沿いでヤナギ類の若枝を採取、ピーカーにさしておいたところ、ネコヤナギ、カワヤナギ、オノエヤナギ、イヌコリヤナギなどのヤナギ属植物はいずれも2週間ないし3週間後に不定根を発生するが、ケシウヤナギでは不定根の発生はみられないことが分った。ケシウヤナギはさし木による繁殖は困難であるとされている。(清水建美)